

児童養護施設入所児童の攻撃性への対処 支援プログラムに関する研究

藤岡孝志

The Inclusive Caregiver-Child Relation Construction Program for Aggressive Children in Child Welfare Facilities

Fujioka Takashi

Abstract: The purpose of this study is to investigate or estimate the inclusive program for building the relationship between a child and his or her caregiver which is constructed for treatment to abused children with reactive or proactive aggression and includes emotion regulation and build interaction between a child and a caregiver.

This article consists of two studies. In study I, I tried to develop CBCL and the Symptom or Sign Check List. And in study II, I confirmed an important tool in programming of future aggressiveness measures by inspecting Residential Map.

On the basis of it, I performed theoretical consideration of treatment to aggressiveness for general consideration. For this purpose I took up two cases, and considering them. As a result, I showed very near numerical value of CBCL as a result of data of abused children by Tsuboi (2008) (a group of A). It is suggested that CBCL as a problem indicator or measure for action of children in child welfare facilities or institutes or nursing home will be able to be one target of support, and an effective assessment tool.

As a result of having examined reliability of Symptom Check List, all the α of cronback were more than 0.7, and for estimating the standard-related propriety, correlation with CBCL was suggested about reliability of Symptom Check List.

About the standard-related propriety, the standard connection propriety of Symptom Check List was suggested by sub standards and correlation between sub standards of Symptom Check List with sub standard(or factor) of CBCL.

Meaningful correlation with CBCL was shown in sub factor of Action, Feelings, Social interaction except for Physical factor.

In addition, about Cognition, and Physical factor and Spirituality, statistically meaningful correlation with all sub standards of CBCL was shown.

On the other hand, possibility of Physical factor of CBCL became independent with problems in Symptom Check List was suggested.

About significance of practical use of Residential Map, I tried quantification from Residential Map, and found the side of relationships that I did not consider came out only in Residential Map quantitatively. Expression of aggressiveness, reaction and interaction as chains were highlighted in particular.

On the basis of the above, construction of relationship with an important person concerned was

suggested to be important in the emotion regulation in last consideration, especially on the standpoint of two aggressions; the self-expression aggressiveness and aggressiveness of reactivity.

Before a child's "choice" of an attack action to other children or caregivers by an aggressive child, if comfortable experiences with an important person or important persons, and "trust" experiences with an important person or persons would appear at that period, through these, adjustment or regulation of aggressiveness is performed by improvement of an independence of will sense (an owner sense to himself or herself) and an appearance of a feeling of unification (or integration) without such an experience being gradually conscious of. Those series of flows were shown by the figure of model.

Key words : CBCL, Symptom Check List, Residential Map, Inclusive Caregiver - Child-Relation Construction Program, Clinical Attachment Approach (CAA)

本研究の目的は、虐待を受けた子どもたちに見られる攻撃的行動に対する対処のために、子どもたちの感情調整や養育者との関係構築をプログラムの中に取り入れている包括的養育者—子ども関係性構築プログラムが有効であるのかどうかを検証することである。

本論文は大きく二つの研究から構成されている。研究Ⅰでは、CBCLと徴候チェックリストを、研究Ⅱでは、レジデンシャルマップを検証することで、今後の攻撃性対処のプログラム作成における重要なツールを確認、開発する。それを踏まえ、総合考察では、攻撃性対処の理論的考察を行う。その際に、2つの事例を取り上げ、考察の対象とした。

その結果、①CBCLについては、坪井(2008)の被虐待群(A群)の結果と非常に近い数値を示していた。CBCLを児童養護施設における子どもたちの問題行動或いは支援のターゲットとするべき指標行動として非常に有効なアセスメントツールとなるということが示唆された。②徴候チェックリストの信頼性と基準関連妥当性の検討を行った結果、クロンバックの α 係数はすべて0.7以上であり、徴候チェックリストの信頼性について示唆された。基準関連妥当性については、CBCLの下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関から、徴候チェックリストの基準関連妥当性が示唆された。行動、感情、社会性の次元は、身体的訴えをのぞいてすべてにおいて、CBCLとの有意な相関が示された。また、認知、身体性と精神性については、CBCLのすべての下位尺度との有意な相関が示された。一方で、身体的な訴えは、上記のような問題行動とは独立して生じる可能性も示唆された。③レジデンシャルマップ活用の意義については、レジデンシャルマップからの数量化を試みたが、レジデンシャルマップだけでは見てこなかった側面が数量的に出てきた。特に、攻撃性の発現、反応、及び連鎖などの側面が浮き彫りになった。

以上を踏まえ、最後に、考察において、攻撃性の二つのタイプである自己発現的な攻撃性及び反応性の攻撃性共に、その情動調整において、重要な人物との関係性構築が重要であることが示唆された。これらを通して、攻撃行動の「選択」の前に、重要な人物との心地よさ体験、重要な人物との信頼体験が出現してくるが、次第に、そのような体験が意識されることなく、主体性感覚の向上、統合感の出現によって、攻撃性の調整が行われるようになっていく、という一連の流れがモデル図によって提示された。

キーワード CBCL 徴候チェックリスト レジデンシャルマップ 包括的養育者—子ども関係性構築プログラム 愛着臨床アプローチ

注 本研究は、平成24年度科学研究費補助金基盤研究(C)『児童養護施設入所児童の攻撃性への対処支援プログラムに関する研究』(研究代表者 藤岡孝志)の助成を受けた。

I はじめに

本研究の目的は、虐待を受けた子どもたちに見られる攻撃的行動（特に身体的・言語的暴力）に対する対処を考える際に、子どもたちの感情調整や養育者との関係構築をプログラムの中に取り入れている包括的養育者—子ども関係性構築プログラム（「愛着臨床アプローチ」含む）が有効であるのかどうかを検証することである。施設における子どもの攻撃的行動には、職員への攻撃と子ども間の攻撃がある。子どもからの職員への攻撃的行動は、職員を傷つけ、職員の共感疲労やバーンアウトのきっかけにもなっていることが指摘されている（藤岡，2008）。また、子ども間暴力は、安心して過ごしていくべき児童養護施設という施設環境を一変させ、入所前の虐待・ネグレクト環境に加え、入所後も攻撃によって傷つくという二重の傷つきを子どもたちに体験させてしまうことを意味している。児童養護施設における被虐待児の攻撃性への対処プログラムは、被虐待児自身への支援プログラムだけでなく、援助者である職員や周りにいる子どもたちへの支援も合わせて行われなければならない。なぜならば、子どもたちの攻撃性は、関係性の中でこそ起きるからである。このことは、施設の中で重要な問題として取り上げられながら、未だ十分な検証を経ていない。「攻撃性への対処プログラム」を、科学的根拠に基づく効果的な援助プログラムモデルとして構築するための基礎資料を得ることが本研究の目的である。

II 本研究における問題の展開

被虐待児の攻撃的行動を理解するには、まず、被虐待児の成長の過程で、被虐待体験が怒りや喪失感情及び攻撃的な行動とどのように関連しているかを検討し、適切な「攻撃的行動アセスメント尺度」を開発しなければならない。また、子ども同士の関わりの中で、攻撃性と向き合うきっかけとなるような友人関係の事前のアセスメントツールの開発も必要となる。子ども同士や職員とのトラブルは、むしろ被虐待児にとっての自分自身の攻撃性への対処方略を獲得する重要なきっかけとなる。藤岡（2009）は、児童養護施設での良好な、あるいは不安定な友人関係をアセスメントするために、友人関係の「レジデンシャルマップ」を開発したが、それを活用することで、攻撃性への対処という課題のきっかけをつくることができる。さらに、このようなアセスメントを踏まえて、養育者—子ども関係性構築の観点に立った攻撃性への対処プログラムを職員と子どもの両方を視野に入れて作成することで、子どもの二重の傷つき、及び職員の深刻な共感疲労・バーンアウトの予防ができるものと考えられる。このような攻撃性を制御・調整するという課題が「誰と」行われているのか、というアタッチメント臨床の観点は極めて重要である（M.Dozier, 2010）。しかし、「**攻撃性（特に身体的・言語的暴力）への対処は、援助者による子どもへの支援あってこそ成り立つ**」ということは、いまだ十分に検証されていない。その方法もいまだ十分に確立されておらず、攻撃的な子どもの措置変更や職員の休職・退職ということにもなりかねない。本研究は、愛着形成・修復プログラムに関する研究実績を踏まえて、より効果的で包括的な被虐待児の攻撃性への対処プログラムを構築すること

を目的とする。その際に、攻撃的行動アセスメント尺度の開発・標準化を試みる。また、すでに開発しているレジデンシャルマップ（藤岡，2009 他）も実際の支援に活用していく。被虐待児の攻撃性に関する課題が浮き彫りになることで、さらなる個別的な被虐待児援助プログラムも特定されてくると考えられる。

アタッチメント理論の臨床的適用は、ボウルビィが非行行動を示す子どもたちへの調査を行ったことに端を発し、多くの臨床的アプローチが開発されてきた。特に最近10年では、アタッチメント理論の臨床的適用は、児童福祉施設における被虐待児への支援プログラムの開発・発展と密接に関係している（藤岡，2008）。施設内の子ども達の攻撃性への対処方略を確立することで、安全で安心できる環境を子ども達に提供することができる。

しかし、これらの点を考える際に、これまで、攻撃性（特に子ども間暴力や職員への暴力）に対処していくための「職員への支援」という観点は十分ではなかった。技能を身につけた職員が子どもからの攻撃から身を守り、その上で、**その職員と共に、子どもが攻撃性への対処能力を高めていく**ことが必要である。このようなプログラムの開発は、これまでの被虐待児支援に一石を投じることになると考えられる。

Ⅲ 子どもの持つ攻撃性に関する基本的理解

1. 児童養護施設における子どもの攻撃性

攻撃的な側面を持つ子どもたちには、大きく二つのタイプがある。一つは、自分自身の怒りのコントロール、あるいはイライラのコントロールがうまくいかず、その理由を自から求めているような場合である。そして、もう一つは、反応性の攻撃性であり、関わり手との一連の時間の流れの中でやむを得ず、怒りの表出をさせてしまうものである。いずれの場合も、感情のコントロール不全の状態であり、一定の歯止めが必要となってくるパターンである。

従来は、感情のコントロールを、感情のコントロール不全を持つ子どもそのものに焦点を当てていく場合が多かったと考えられる。また、その大きな理由として被虐待経験を挙げる場合などがある。実際、坪井（2008）によれば、被虐待経験のある子どもがない子どもに比べて有意に、攻撃的な状態を示しているという報告がある。

しかし、実際の養育や心理治療において、我々が課題としなければならないところは、子どもだけで単独で攻撃性を発現するときだけではなく、社会的な文脈が大きく左右しているときもある。

子どもが集団で生活することの「特異性」においては、子ども間暴力、いじめ・不登校などの伝播などの課題があり、職員集団が養育することの「特異性」としては、養育の考え方の調整、チームワークの妙、さまざまな愛着対象との間での関係性の特異性、施設長・事務長等の役割などがある。心理職にとっての個別面接、集団面接、生活場面面接、FSWにとっての施設と家庭、地域などが課題となる。これらを包括的に捉えることで、より現実に即した攻撃性への対処プログラムが作成できるものと考えられる。

2. 自己発現的な攻撃性と反応性の攻撃性

Mullin,B.C. & Hinshaw,S.P. (2007) は、攻撃性を自己発現的な攻撃性 (Proactive aggression) と反応性の攻撃性 (Reactive aggression) に分けている。前者と後者では明らかに、後者のほうが、社会的な文脈を通して理解されなければならないが、発現性の攻撃性も、そのきっかけとしては何らかの理由があると考えられる。反応性の攻撃性 (Reactive aggression) は、恐れなどを感じた時に、その反応として、攻撃が出てしまう時である。ここで重要なことは、子どもの側の社会的な文脈からの読み取りが、自分自身の反応的な攻撃性を引き出してしまうということである。このような読み取りの自動化が起きている可能性がある。すなわち、社会的な文脈が曖昧であったり、はっきりとしていない状況であればあるほど、子どもたちは、相手の表情やしぐさの中に、自分に対する脅威や怖さなどを読み取り、それに対する防御として、攻撃を加えている可能性がある。「ことのなり行き」というコンセクエンスを十分に考える余裕を持たずに、衝動的な攻撃性の発露とつながる。

一方で、自己発現的な攻撃性 (Proactive aggression) は、自分のほうから湧き上がる怒りや攻撃性であり、おそらく、子どもが置かれている社会的な文脈を超えて作用するものと考えられる。例えば、両親が離婚の危機にあるとか、両親による面談で、自分の存在に対する希薄な関心を示されてしまった時の向けようのない怒りなど、子どもたちは日々生活の中でさらされていると考えられる。また、慢性的なトラウマティックな体験の蓄積は、次第に、怒りへと転化する可能性がある。PTSD のなかに易怒性があるが、これは、怒ることが問題とされる以前に、そのような状況に社会的文脈を超えて曝されてしまうことゆえではないだろうか。

また、あえて感情を伴うことのない攻撃性 (nonemotional aggression) も存在することが知られている (Mullin,B.C. & Hinshaw,S.P. 2007)。感情を伴わないとあえて無感情にすることでの感情調整が、結果として、感情の暴走を主体性のかかわりを超えて発動させてしまっている可能性もあるだろう。

無差別的な攻撃性という言葉があるが、少なくとも、児童養護施設においては、このようなことは稀であると考えられる。なぜならば、「生活の場」という文脈がすでにあるからである。

子どもの側の課題として、藤岡 (2010) は、子ども間の様々な感情的な行き違いや葛藤があり、結果として、子どもの中でのトラブルや暴力にまで発展することを指摘している。

ただ、感情の調整がうまくいかない場合に、それがうまくいくようになることは、子どもたちの有能感を高めることに大きく寄与するであろう。怒りや怖さなどを誘発する場面でも、とらえようによっては、自分自身がさまざまなことをコントロールできるということを再確認する場にも転化され、一次的で、状況依存的な出来事に帰属させようような挑戦的な場にもなりうる。Shaver,P.R.& Mikulincer,M. (2007) も、安定した人たち (ここでは、子どもたち) は、このように、建設的な状況を構築できると指摘している。筆者が、問題行動は、かかわりを深める機会であることとらえることの重要性を指摘しているが (藤岡 2008)、それは、子ども自身の有能感の高まりにもつながる可能性がある。

3. 養育者の側の課題

養育者がいかに子どもの攻撃性を誘発しないように関われるか、また、仮に誘発しても、あ

るいは、攻撃性が発言した場面に立ち会っても、そこを静めるところこそ、養育者の援助技術である。大枠としての、暴力は絶対に許さないというルールを設定していても、子どもたちは、怒りを表出させている時は、ルールのことはどこに消え失せてしまっている。

援助者や養育者自身が怒りのシークエンス（流れ）の中に入り込まない努力がまず求められる。そのうえで、仮に、発現性の攻撃性に立ち会ったとしても、静める努力を子どもと一緒にしていくことが大事となる。

このような経験は、子どもにとって、この人（Aさん）と一緒にいるときは、自分は気持ちを静めることができる人だというエピソードに付随して、子どもの情動の記憶に蓄積されていくと考えられる。一回一回の体験が、子どもの側から見て、職員や養育者の有用性（役立つ存在）を高めると考えられる。情緒的な活用性の向上である。アタッチメント理論では、この情緒的な活用性を重視しているが、その考え方が援用できると思われる。日ごろから蓄積された、エピソードの連続からシナリオが次第に定着していき、愛着対象として明確化していき、そのうえで、内的ワーキングモデルの生成に寄与するものと考えられる。

大事なことは、子どもが、情緒的に不安定になったり、イライラしている時に、職員との関係性の中でそのような体験が蓄積されていると、職員がいるだけで、また、職員が言葉がけをする中で、自分はこの感情をコントロールできるかもしれないという自分の情緒調整能力についての評価ができるということである。感情調整のコンピテンスが高まったと考えられる（図1）。

職員のAさんがいると、自分は、わーとなってしまう気持ちを静めることができると思うけれど、Aさんがいなくて、特に、職員のBさんがいると、もう調整できないと思ってしまう。

Bさんが一緒のときは、ますますエスカレートしてしまって、我を忘れて、ドアをける、ガラスを割るなどいろいろなことをしてしまう。

これは、職員Aが、実際にその場で調整を援助するだけでなく、すでにその前に、その人が存在するだけで、予測がついてしまうということである。このように情動調整は、情動調整ができる自分とできない自分という両方に、職員に対する予測性が左右しているということである。

藤岡（2011）は、養育の要点として、予測性、感受性、有用性、志向性、存在性の5つを取り上げたが、これは、アタッチメント対象として、職員が選ばれていくプロセスをたどるための説明概念だけでなく、実際のアタッチメント対象がどのように情動調整に寄与していくのか、の例証になっているのではないかと考えられる。臨床的な検証は、今後さらに慎重に行われなければならないが、アタッチメント理論をはじめとする実証された概念の臨床的な演繹として、科学的臨床適用という意味において重要なことである。

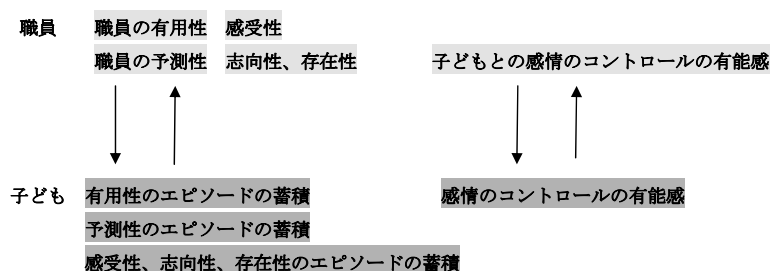


図1 職員—子どもの「感情調整関係」の構成

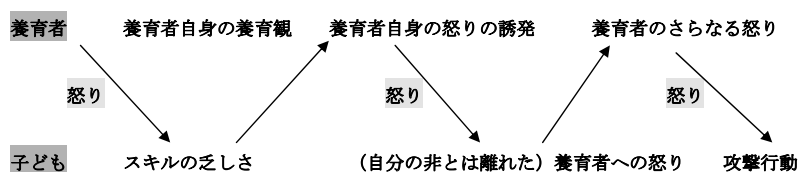


図2 子ども—養育者の側の反応性攻撃性のシーケンス

また、図2で見るように、職員とのかかわりで、どうしても攻撃性を引き出してしまいう反応性の攻撃性を有する子どもたちには、上記のシーケンスを自動化させないように、職員が、ふっと冷静になる、職員自身が子どもとの間で形成されてしまうシーケンスの中に自動的に入り込まないなどの工夫が必要となるであろう。

本研究Ⅰでは、まず、児童養護施設における攻撃性の実態を把握し、そのうえで、それに対する対処の理論的考察を行う。またそれに伴って、仮説的なプログラムを提示していく基礎データとする。続いて、研究Ⅱでは、藤岡（2009）が作成したレジデンシャルマップを検討した。

4. レジデンシャル・マップとは

藤岡（2009）を参考にしながら、以下、レジデンシャル・マップについて検討していく。藤岡（2009）の定義に従えば、『レジデンシャル・マップとは、システム論的な観点に立って、施設内で一緒に暮らす利用児・者どうし、利用児・者と職員、及び職員どうしのそれぞれの相互の関係を視覚的にとらえる方法である。』児童福祉関係の施設においても、生活を共にすることで、同様の関係性が生じ、そのことが子どもたちの生活に色濃く影響を及ぼし、さらに、このような子どもたちに、職員が関わることで、さらに、関係性はよりダイナミックになっていくものと考えられる。藤岡（2009）は、児童福祉施設だけでなく、障害者施設、高齢者施設をはじめ、様々な福祉施設での活用が期待されると述べている。以下図3に、表記方法を示す。

図4には、架空の事例を取り上げた。児童養護施設内の一つの園舎で暮らしている子どもたちの関係性を表現するとこのようになる。たとえば、職員が見た場合の、子どもの関係性はこのようなになる。これに、二重丸◎をいれて職員を表現すると、職員と子どものダイナミックな関係性と施設内でのシステムを見ることができる。たとえば、二重丸の中に、職員の名前を入

レジデンシャルマップの活用 (表記方法)

- かなり良好な関係性(協力関係や信頼関係) =
- 良好な関係性(協力関係や信頼関係) -
- わるくない関係性(協力関係や信頼関係)
- 強い信頼感、支援、好意感情 →
- 信頼感、支援、好意感情、サポート、支援 ...→
- 暴力や攻撃 W→

図3 レジデンシャルマップの説明
(藤岡 2009)

レジデンシャルマップ(藤岡、2009)
(架空事例)

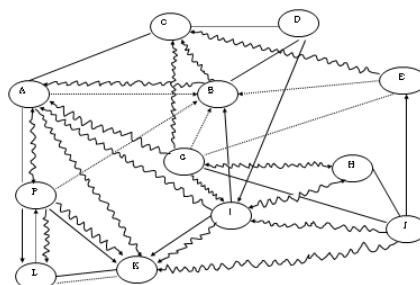


図4 レジデンシャルマップの例示
(架空事例)

れて、関わりの度合いによって、子どもから近い場所へと、名前の入った◎を配置していく。この場合、名まえは、イニシャルにすることや、記号にすることも考慮しなければならないことがある。また、書き手は、職員だけでなく、子ども自身に書いてもらうこともある。ある子どもの丸が、紙の端で切れていて、4分の1の扇形になっていることもあり、思いのほか、子どもたちの、同居している子どもたちへの距離感や感情を表出してもらうことができるという実感を持っている(藤岡 2009 参照)。

これで見ると、Aに、攻撃やネガティブな感情が集中して向かっていることがわかる。さらに、AからKやFに、ギザギザの線が向かっており、ネガティブな感情の連鎖が起きていることが一目瞭然にわかる。後に述べるように、児童福祉施設内でおきている子どものさまざまな攻撃行動の一つに、このような暴力の連鎖、ネガティブな感情の連鎖が起きている可能性がある。

藤岡(2009)は、レジデンシャル・マップの分析方法として、マッピングに示されたものの中からいくつかをカテゴリーとして抽出し、その数を算出することで、より、客観的な視点から子どもたちの関係性を把握することの重要性を指摘している。ギザギザの矢印の向かう先、ギザギザの矢印の出る数、かなり良好な矢印の向かう先(→)、かなり良好な矢印の出る数、良好な矢印の向かう先(···→)、良好な矢印の出る数、かなり良好な関係性の数(=)、良好な関係性の数(-)など、有効な指標となる可能性がある。

架空事例(図4)を例にとると、ギザギザの矢印の向かう先が3つ以上になっているのが、A,C,Kとなっており、攻撃性の矛先として、十分な配慮が必要となる子である。さらに、F,G,Iは、ギザギザの矢印の出先の数が3つ以上となっており、いじめを引き起こしている事例と同様の配慮、攻撃性を向けなくてもよくなるにはどのような支援が必要か、ということが特に必要となる子どもたちである。

また、ギザギザの矢印の向かう先、及び出所と両方に矢印がある、A,F,G,H,Iは、攻撃性の連鎖が想定される子どもたちである。さらに、B,E,Jは、誰かから刺激を受けることなく、自分のほうから、攻撃性の発信源となっており、施設内以外の様々な理由(たとえば、実親との面会の後、精神的な不調になる場合、など)での攻撃性の源泉を想定しなければならないだろう。

被虐待事例などの、攻撃性の発信は、十分想定しなければならないことであろう。また、C,K,Lは、攻撃の矛先を向けられるばかりで、どこにも自分のほうから攻撃性を発信していない。攻撃のターゲット、あるいはいじめの固定化などを想定しなければならない子どもであろう。すでにみたように、自己発現的な攻撃性と反応性の攻撃性との区別の一つの例証として興味深いと言える。

すでにみてきたように、レジデンシャル・マップは、子どもたちの施設内での人間関係、あるいはおかれている生きづらさの状況を、理解する上でとても重要な機能を果たすと考えられる。このようなマップを同じ園舎内で仕事をしている職員が共有することで、より、行き届いた養育の場が保障されていくものとの考えられる。

以上から、研究Ⅱでは、レジデンシャルマップを実際に活用することで、子ども同士の関係性、特に、攻撃性の源泉としての関係性の悪化を子ども同士の関係性を踏まえた状況の中で把握することの重要性を検討する。

本論文は大きく二つの研究から構成されている。研究Ⅰでは、CBCLと徴候チェックリストを、研究Ⅱでは、レジデンシャルマップを検討することで、今後の攻撃性対処のプログラム作成における重要なツールとしての位置づけを明確にすることとする。以上を踏まえ、総合考察では、攻撃性対処の理論的考察を行う。その際に、2つの事例を取り上げ、考察の対象とした。

Ⅳ 研究Ⅰ—調査—児童養護施設における攻撃性行動のアセスメントの実際に関する研究—

1. 目的

児童養護施設において、攻撃性行動がどのような現状にあるかを把握し、かつ、実際の攻撃性行動への対処のアセスメントの一端としての可能性を検討する。用いたのは、CBCLと徴候チェックリストであるが、徴候チェックリストについては、臨床の現場から開発されてきたもので、いまだ妥当性や信頼性が検討されていない。本研究ではその点も検証の一步として位置付ける。

2. 方法

A児童養護施設の入所児童91名について、CBCLを実施した。また、合わせて、徴候チェックリストを同じ子どもたちについておこなった。

徴候チェックリストは、参考資料として掲載したが、日本語の質問項目の記述は、すべて、筆者によって作成された。原版であるリヴィーとオーランズ(2006)によるものは、項目しかなく、具体的な質問紙となっていないためである。この作業によって、このチェックリストの信頼性、妥当性が検討できる形となった。

調査対象は、A児童養護施設の職員であり、子どもたち一人一人について、CBCLと徴候

チェックリストを同じ職員が同じ子どもについて思いうかべながら行った。

対象となった施設は、一施設であるため、施設が特定されることを避けるために詳細はここでは記述しない。ただ、虐待による施設入所理由がほとんどであり、また、発達障害を疑われる子どもたちも含まれている。典型的な児童養護施設の入所理由の子どもたちが含まれている。

3. 結果

1) CBCL について

(1) CBCL の結果 (9 つの観点)

CBCL の結果をまとめたのが、表 1 である。

それぞれの結果を見てみると非常に興味深いことに、坪井 (2008) の被虐待群の結果と今回の調査の結果が非常に近い数値を示しているということである。

表 1 CBCL (9 つの観点) の平均値

	I ひきこもり	II 身体的訴え	III 不安 / うつ	IV 社会性の問題	V 思考の問題	VI 注意の問題	VII 非行的行動	VIII 攻撃的行動	その他の問題	
n	91	91	91	91	91	91	91	91	91	
平均	2.3	0.55	3.37	3.02	1.07	4.73	2.67	7.25	4.79	
参考 坪井 (2008) の A 群	2.24	0.62	2.78	3.62	0.74	4.66	2.65	7.13	2.51	被虐待経験あり (91 名)
参考 坪井 (2008) の N 群	1.92	0.33	1.98	2.39	0.24	3.27	1.33	4.04	1.39	被虐待経験なし (51 名)
標準偏差	2.77	1.01	3.76	2.94	1.67	4.09	3.06	7.43	4.53	
参考 坪井 (2008) の A 群	2.7	1.04	3.8	3.19	1.68	3.87	3.84	7.55	3.04	被虐待経験あり (91 名)
参考 坪井 (2008) の N 群	1.7	0.68	2.35	2.41	0.59	2.67	1.75	4.27	1.5	被虐待経験なし (51 名)
範囲	12	5	19	11	8	15	13	34	16	
最小値	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
最大値	12	5	19	11	8	15	13	34	16	
中央値	1	0	2	2	0	4	2	5	3	

(2) CBCL の結果 内向・外交尺度・総得点

BCL の結果 (内向・外交尺度・総得点) についても、坪井 (2008) の被虐待群に近い結果であった。標準偏差も同様の結果を示している。今回のほうがやや高めに出ている。総じて、抱えている困難度が高いことがうかがえる。

表 2 CBCL の結果 内向・外交尺度・総得点

	総得点	内向尺度得点	外向尺度得点	
n	91	91	91	
平均	25.16	5.51	9.78	
参考 坪井 (2008) の A 群	15.67	4.16	5.37	被虐待経験あり (91 名)
参考 坪井 (2008) の N 群	1.92	0.33	1.98	被虐待経験なし (51 名)
標準偏差	23.79	5.66	9.77	
参考 坪井 (2008) の A 群	22.32	5.99	10.93	被虐待経験あり (91 名)
参考 坪井 (2008) の N 群	11.12	3.59	5.55	被虐待経験なし (51 名)
範囲	110	28	46	
最小値	0	0	0	
最大値	110	28	46	
中央値	22	4	6	

（３）攻撃性の次元

表３に、各年齢層ごとの攻撃性の平均値をまとめた。それをグラフ化したのが、図５である。一要因の分散分析の結果、有意ではなく、有意傾向もなかった（ $F(4,86) = 1.05$, $p = 0.386 > .10$ ）。

表３ 各年齢層における攻撃性の次元

攻撃性	n	平均
未就学児	11	7.182
小学校低	18	9.833
小学校高	19	8.105
中学校	25	6.240
高校以降	18	5.222

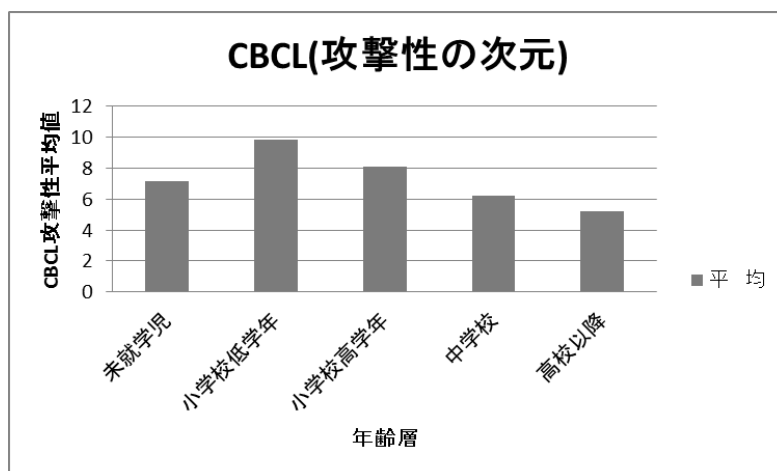


図５ 各年齢層における CBCL（攻撃性の次元）

（４）社会性の次元

図６に、各年齢層ごとの攻撃性の平均値をまとめた。一要因の分散分析の結果、有意ではなく、有意傾向もなかった（ $F(4,86) = 0.24$, $p = 0.916 > .10$ ）。グラフで見る限り、小学校高学年が最も高かった。

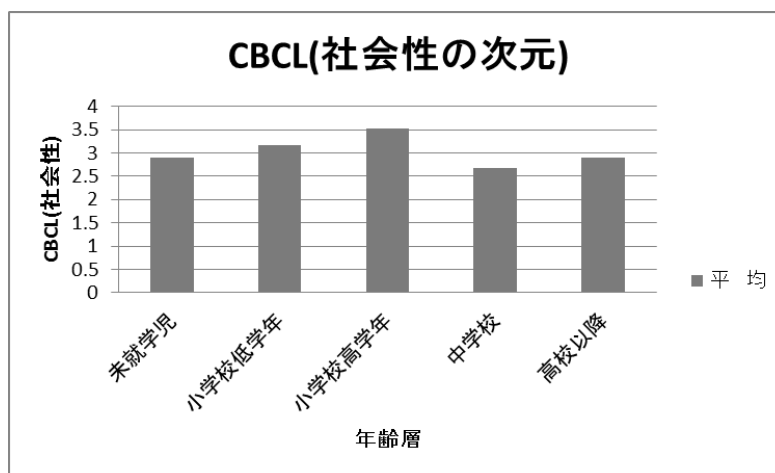


図6 各年齢層におけるCBCL（社会性の次元）

（5）不安 / うつの次元

図7に、各年齢層ごとの不安 / うつの次元の平均値をまとめた。一要因の分散分析の結果、有意ではなく、有意傾向もなかった ($F(4,86) = 0.90$, $p = 0.462 > .10$)。グラフを見る限り、小学校低学年が最も高かった。

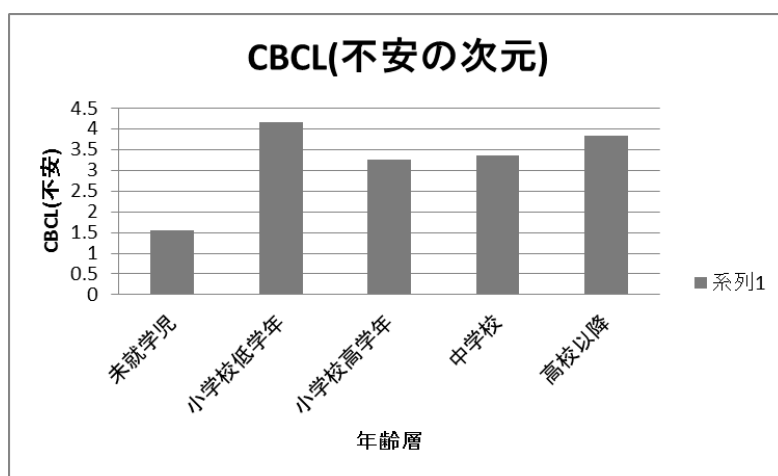


図7 各年齢層におけるCBCL（不安 / うつの次元）

（6）CBCL の各9つの視点の相互の相関

表4に、CBCLの各9つの視点の相互の相関を示した。無相関の検定の結果、以下のように、多くの下位尺度間での相関がみられた。本調査においても、それぞれの下位尺度が関連し合っていることが示唆された。

表4 CBCLの各9つの視点の相互の相関

単相関	I ひきこもり	II 身体的訴え	III 不安/うつ	IV 社会性の問題	V 思考の問題	VI 注意の問題	VII 非行的行動	VIII 攻撃的行動	その他の問題
I ひきこもり	1.0000	*	**	*	**	**	**	*	**
II 身体的訴え	0.2602	1.0000	*		*				**
III 不安/うつ	0.5211	0.2590	1.0000	**	**	**	**	**	**
IV 社会性の問題	0.2474	0.1665	0.5067	1.0000	**	**	**	**	**
V 思考の問題	0.4328	0.2070	0.5250	0.4253	1.0000	**	**	**	**
VI 注意の問題	0.3332	0.1913	0.5897	0.7022	0.5116	1.0000	**	**	**
VII 非行的行動	0.4358	0.0374	0.5512	0.4963	0.3618	0.5100	1.0000	**	**
VIII 攻撃的行動	0.2345	0.1619	0.5246	0.6220	0.3904	0.5993	0.6848	1.0000	**
その他の問題	0.5331	0.2923	0.5646	0.5372	0.5180	0.6193	0.5533	0.5817	1.0000

(*:5% **:1%)

2) 徴候チェックリストについて

(1) 下位尺度の平均値

表5に見るように、1から2の間を推移している。

表5 徴候チェックリストの下位尺度の平均値

	行動	認知	感情	社会性	身体	精神性
平均	1.89	1.97	1.96	1.94	1.81	1.82
標準偏差	1.11	1.16	1.08	1.11	1.02	1.09

(2) 下位尺度間の相関

徴候チェックリストの下位尺度間の相関を見ると、それぞれが強い相関で関連し合っており、一つの構造をなしていることが示唆される。どの数値も、0.6以上であり、中程度から高い相関を示している。今回の調査では、明らかにしなかったが、各年齢層ごとの関連の度合いなどで、発達期における課題性の構造が異なっていることも示唆される。

表 6 徴候チェックリストの下位尺度間の相関

単相関	行動	認知	感情	社会性	身体	精神性
行 動	1.0000	**	**	**	**	**
認 知	0.8144	1.0000	**	**	**	**
感 情	0.8884	0.8106	1.0000	**	**	**
社会性	0.8784	0.7377	0.8694	1.0000	**	**
身 体	0.8123	0.7230	0.7883	0.7735	1.0000	**
精神性	0.8011	0.6591	0.7401	0.7241	0.6869	1.0000

(*:5% **:1%)

(3) 徴候チェックリストの信頼性

信頼性の検討のために、クロンバックの α 係数を算出した（表7）。その結果、すべてが、0.7以上であり、今回の調査で、徴候チェックリストの信頼性について、示唆された。

表 7 徴候チェックリストの信頼性（クロンバックの α 係数）

	行動	認知	感情	社会性	身体性	精神性	全体
クロンバックの α	0.9274	0.7856	0.8166	0.8897	0.8180	0.8636	0.9727

(4) 徴候チェックリストの妥当性の検討

① CBCL の下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関

BCL の下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関（表8）から、徴候チェックリストの基準関連妥当性が示唆された。行動、感情、社会性の次元は、身体的訴えをのぞいて、すべてにおいて、有意な相関が示された。また、認知、身体性と精神性については、CBCL のすべての下位尺度との有意な相関が示された。

一方で、身体的な訴えは、上記のような問題行動とは独立して生じる可能性も示唆された。

ほとんどの CBCL の下位尺度との有意な相関がみられたことから、基準関連妥当性が示唆された。

それぞれの相関の高いほうから見てみると、徴候チェックリストの行動は、CBCL の攻撃的行動が0.8255 と最も大きく、二つの指標の関連性の高さを示唆している。

認知については、注意が最も高く、認知の問題が、注意の配分などの側面を反映していることが示唆された。また感情は、興味深いことに、攻撃性との関連性が最も高く、0.8271 となり高い相関を示しており、感情の調整が攻撃性と深く関連しているという結果が示された。社会性のほうは、これも攻撃性と関連が最も高く、徴候チェックリストが、攻撃性との関連性を示す指標となりうる結果であった。身体も、攻撃性との相関が最も高く、身体の側面からの攻撃性との関連性の分析の必要性が示唆された。さらに、精神性は、CBCL の非行行動との関連が最も高く、共感性の乏しさや、生きている意味がしないなどの精神性項目の観点から、非行行動を見なおすきっかけとして、この徴候チェックリストが役立つ可能性を示唆する結果であった。

表 8 CBCL の下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関

単相関	行動	認知	感情	社会性	身体	精神性
I ひきこもり	0.4838	0.4192	0.4881	0.3278	0.5041	0.6129
II 身体的訴え	0.1865	0.2087	0.1989	0.1827	0.3114	0.3195
III 不安 / うつ	0.5898	0.5183	0.5541	0.4404	0.4992	0.6239
IV 社会性の問題	0.6135	0.6464	0.6029	0.6436	0.5712	0.5237
V 思考の問題	0.4574	0.5203	0.5495	0.4088	0.5281	0.4252
VI 注意の問題	0.7325	0.7562	0.6667	0.6124	0.6206	0.5246
VII 非行的行動	0.7745	0.6091	0.6912	0.7083	0.6628	0.7078
VIII 攻撃的行動	0.8255	0.6641	0.8271	0.8451	0.7285	0.6122
その他の問題	0.7154	0.6396	0.5954	0.6230	0.6664	0.6284
	身体的訴えを除いてすべて、1 %水準で有意	身体的訴えのみ 5%、他はすべて 1 %水準で有意	身体的訴えを除いてすべて、1 %水準で有意	身体的訴えを除いてすべて、1 %水準で有意	すべて、1 %水準で有意	すべて、1 %水準で有意

②重回帰分析の結果

次に、さらに、他の尺度に対して、この徴候チェックリストの尺度が説明のために有効かどうかを検討するために、CBCL の下位尺度を目的変数とする重回帰分析を行った。すなわち、攻撃的行動を目的変数とし、徴候チェックリストの各 6 つのカテゴリーのそれぞれの平均値を説明変数として、重回帰分析を子なった結果、以下のような結果が得られた（有意水準： * * ; 1 %水準、* ; 5 %水準、傾向 ; 1 0 %以下）。重回帰分析の結果の中で、 R^2 については、いずれも 0.5 を上回っており、重回帰式の妥当性が示唆された。それを踏まえて、各結果を分析する。

攻撃性については、感情、社会性、引きこもりについては、感情と社会性、身体的な訴えについては、行動、身体、精神性が、注意の問題には、認知が、思考については、行動、感情が、不安 / うつについては、社会性、精神性が、社会性については、認知が、非行には、精神性がそれぞれ有意な影響を与えている可能性が示唆された。

表 9 CBCL（攻撃性の次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（攻撃性の次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	0.6674	2.1677	0.1301	0.7589		0.8677
認 知	-1.5979	1.1908	-0.3332	0.1833		
感 情	3.5777	1.6099	0.7347	0.0289	*	
社会性	3.3283	1.5513	0.6728	0.0348	*	
身 体	-0.8991	1.3112	-0.1692	0.4948		
精神性	-0.8734	0.9757	-0.1723	0.3733		

表 10 CBCL（引きこもりの次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（引きこもりの次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	-0.3156	0.8944	-0.1760	0.7250		0.8129
認 知	-0.0860	0.4913	-0.0513	0.8615		
感 情	1.4478	0.6642	0.8503	0.0321	*	
社会性	-2.6131	0.6401	-1.5107	0.0001	**	
身 体	1.0365	0.5410	0.5578	0.0588	傾向	
精神性	1.9477	0.4026	1.0990	0.0000	**	

表 11 CBCL（身体的訴えの次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（身体的訴えの次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	-0.9107	0.3966	-1.6162	0.0242	*	0.5797
認 知	0.2683	0.2179	0.5093	0.2216		
感 情	-0.0191	0.2946	-0.0357	0.9485		
社会性	-0.1616	0.2838	-0.2973	0.5707		
身 体	0.6061	0.2399	1.0381	0.0134	*	
精神性	0.5368	0.1785	0.9639	0.0035	**	

表 12 CBCL（注意の問題の次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（注意の問題の次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	2.3664	1.2439	0.7599	0.0605	傾向	0.8821
認 知	2.1628	0.6834	0.7429	0.0022	**	
感 情	0.0878	0.9238	0.0297	0.9245		
社会性	-1.0472	0.8902	-0.3487	0.2428		
身 体	-0.4130	0.7525	-0.1280	0.5846		
精神性	-0.5390	0.5599	-0.1751	0.3385		

表 13 CBCL（思考の問題の次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（思考の問題の次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	-1.4320	0.6006	-1.4569	0.0194	*	0.7047
認 知	0.6299	0.3300	0.6854	0.0597	傾向	
感 情	1.3179	0.4461	1.4121	0.0041	**	
社会性	-0.8299	0.4299	-0.8753	0.0569	傾向	
身 体	0.6084	0.3633	0.5973	0.0978	傾向	
精神性	0.3131	0.2704	0.3223	0.2501		

表 14 CBCL（不安 / うつの次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（不安・うつの次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	1.3666	1.2801	0.5424	0.2888		0.8053
認 知	0.1395	0.7032	0.0592	0.8432		
感 情	1.1997	0.9507	0.5014	0.2105		
社会性	-2.3824	0.9161	-0.9802	0.0110	*	
身 体	-0.1885	0.7744	-0.0722	0.8083		
精神性	1.8719	0.5762	0.7516	0.0017	**	

表 15 CBCL（社会性の問題の次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（社会性の問題の次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	-1.5145	0.9918	-0.7256	0.1305		0.8312
認 知	1.5455	0.5449	0.7919	0.0057	**	
感 情	-0.1140	0.7366	-0.0575	0.8774		
社会性	1.3579	0.7098	0.6744	0.0592	傾向	
身 体	-0.0528	0.6000	-0.0244	0.9300		
精神性	0.4028	0.4464	0.1952	0.3695		

表 16 CBCL（非行的行動の次元）を目的変数とし、徴候チェックリストの下位項目を説明変数とした重回帰分析の結果

目的変数；CBCL（非行的行動の次元）						
説明変数名	偏回帰係数	標準誤差	標準偏回帰係数	P 値	判 定	R ²
行 動	1.1136	1.0015	0.5527	0.2693		0.8142
認 知	-0.4541	0.5502	-0.2411	0.4114		
感 情	0.0515	0.7438	0.0269	0.9449		
社会性	0.2269	0.7167	0.1168	0.7524		
身 体	-0.2992	0.6058	-0.1433	0.6226		
精神性	1.0320	0.4508	0.5183	0.0246	*	

4、考察

1) CBCL の有効性について

(1) 被虐待群（A 群）との類似性

それぞれの結果を見てみると非常に興味深いことに、その他の問題を除いて、坪井（2008）の被虐待群（A 群）の結果と今回の調査の結果が非常に近い数値を示しているということである。CBCL を児童養護施設における子どもたちの問題行動或いは支援のターゲットとするべき指標行動として操作的に位置づける際に、非常に有効なアセスメントツールとなるということが示唆された。

虐待を受けていないとされる N 群との違いも今回の調査で歴然としていた。改めて、施設における攻撃性などを含む問題行動への対処が、施設での支援の中核を占める可能性が示唆された。

また、さらに興味深いことに、数値のばらつきを示す標準偏差も、今回の調査は、N 群より

も A 群に近くなっているということである。このことは、N 群が一定の安定した数値に入っているのに対して、平均値は、A 群に近くなっているだけでなく、子ども一人一人の個人差についても配慮すべき点が示唆される。

このような、平均値及び標準偏差が、坪井（2008）の結果にきわめて近い値を示していることは、今回の研究の大きな結果と言わざるを得ないほどの知見である。

（２）内向・外交尺度との関連性

CBCL の結果（内向・外交尺度・総得点）についても、坪井（2008）の被虐待群に近い結果であった。標準偏差も同様の結果を示している。総じて、やや高めに出ている。このように、坪井の結果が、施設ごとの置かれている状況の一定の基準値になる可能性がある。その基準値が、適応に向けてのどのくらいの数値に位置しているのかは今後の研究が待たれるところであるが、本研究では、その方向性が示唆されたうえでとても意義のあることと筆者は考えている。

（３）攻撃性の次元

攻撃性の次元において、各年齢層ごとの有意な差は見られなかった。基本数値で見てきたように、得られた結果のばらつきが大きく、有意な差までには至らなかったが、グラフで見る限り、小学校低学年（小学校 1 年生から 3 年生）が最も大きく、次いで、高学年（4 年生から 6 年生）、未就学児、中学生、高校生以上と続いている。

中学生が最も大きな数値になることも予想されたが、結果は意外にも、小学生低学年であった。落ち着きのなさ、相互の情動コントロールの難しさなど、攻撃性のきっかけになっていることが示唆された。ただ、言葉を変えれば、小学校低学年での、攻撃性などに伴う情動の調整、自己コントロールを支援することで、高学年以降の思春期への対処にもつながる可能性として、未就学児も含めて早い段階からの対処が求められていると言える。

（４）社会性の次元

社会性の次元も有意ではなく、有意傾向もなかった。ただ、グラフで見る限り、高学年が最も大きく、ついで、低学年、未就学児、中学生、高校生以降と続いている。攻撃性との違いが興味深い。ターゲットの中心は、小学生であることがここでもうかがえる。

（５）不安 / うつの次元

不安 / うつの次元も有意ではなく、有意傾向もなかった。グラフで見る限り、小学生低学年が最も多く、ついで、高校生以降、中学生、小学校高学年と続いている。小学校低学年の不安の高さが、攻撃性や社会性における問題につながっている可能性が示唆された。

（６）CBCL 下位尺度相互の関連性について

CBCL の各 9 つの視点の相互の相関から、9 つの問題性が相互に絡んでいることが示唆された。特に、攻撃性は、非行、社会性、注意、不安 / うつ、思考、引きこもり、身体的な訴えの順で相関があり、非行傾向との関連性や社会性における問題性と関連で対処すべき点が改めて示唆された。また、CBCL における注意の指標が、他の要因との関連性を示している。感情のコントロールは、注意のコントロールともいえる。攻撃性対処のために気を紛らわすことがあったり、特定の怒りなどの感情に、注意が固定するとなかなかそこから離れることができないなど、情動のコントロールに注意の仕方が関わっていることが示唆されているが、本研究でもそ

のことの可能性が示唆された。

2) 徴候チェックリストについて

(1) 下位尺度の平均値

表に見るように、1から2の間を推移している。このことは、施設入所における状況をモニターするうえで、3や4などの数値になることは、その子の持つ課題性として、対処のターゲットに置くことができることを示唆する点である。一人一人のプロフィールを作成することが、攻撃性対処において有効であることが示唆された。

(2) 徴候チェックリストの下位尺度間の相関

徴候チェックリストの下位尺度間の相関を見ると、それぞれが強い相関で関連し合っており、一つの構造をなしていることが示唆される。どの数値も、0.6以上であり、中程度から高い相関を示している。今回の調査では、明らかにしなかったが、各年齢層ごとの関連の度合いなどで、発達期における課題性の構造が異なっていることも今後の検討課題である。

(3) 徴候チェックリストの信頼性の検討

信頼性の検討のために、クロンバックの α 係数を算出した。その結果、すべてが、0.7以上であり、今回の調査で、徴候チェックリストの信頼性について、示唆された。藤岡（2008）も、その検証の必要性を指摘していたが、臨床的に構築されたチェックリストではあるが、このように、データに基づいて検証された意義は大きいと考えられる。

(4) 徴候チェックリストの基準関連妥当性について

CBCLの下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関から、徴候チェックリストの基準関連妥当性が示唆された。行動、感情、社会性の次元は、身体的訴えをのぞいて、すべてにおいて、有意な相関が示された。また、認知、身体性と精神性については、CBCLのすべての下位尺度との有意な相関が示された。一方で、身体的な訴えは、上記のような問題行動とは独立して生じる可能性も示唆された。

すでに、徴候チェックリストは、臨床的な場面で使用されていて、子どもたちの抱える課題について包括的に捉えることができる。今回は、その徴候チェックリストが、妥当性、信頼性共に検証されているCBCLによって、その相関の高さから、併存的妥当性あるいは基準関連妥当性がある程度検証されたことは意義のあることと考える。藤岡（2008）も指摘しているように、臨床的な場を踏まえて形成されたチェックリストが、このような形での検証の作業が地道に行われていかなければならない。

(4) 徴候チェックリストによるCBCLの指標の説明

CBCLの中の攻撃的行動などの下位項目を目的変数とし、徴候チェックリストの各6つのカテゴリーのそれぞれの平均値を説明変数として、重回帰分析を子なった結果、攻撃性については、感情、社会性が、引きこもりについては、感情と社会性が、身体的な訴えについては、行動、身体、精神性が、注意の問題には認知が、思考については行動、感情が、不安/うつについては社会性、精神性が、社会性については認知が、非行には精神性がそれぞれ有意な影響を与えている可能性が示唆された。重回帰分析なので、因果関係まで考察することはできないが、一方の影響を想定した分析の中で、十分説明できる要因が、徴候チェックリストに含まれてい

たのは興味深いことである。

今後、攻撃性などをアセスメントしていく際に、CBCL とこの徴候チェックリストを併用していくことの有効性が示唆された。

なお、ここで留意すべきは、精神性が、身体的な訴えと、不安 / うつ、非行の 3 つの次元と関連しているという点である。資料 1 でも見て分かるように、精神性は、以下の 4 つの項目から成り立っている。

50. 生きていることの意味や目的、意義を感じていない。51. 信仰や人との共感などをもって人に接したり、人に対して敬意を示したり、人の気持ちをわかろうとしたりすることが乏しい。52. 悪いことや、人生の暗いところのほうばかりに気持ちがいてしまう。53. 自責の念や良心の呵責などが欠けている。

一般家庭においても、このような側面がどのくらい重視されているかは、改めて検討されなければならないほどの、大きな課題である。

V 研究Ⅱ—子ども間の関係性理解のためのレジデンシャルマップの開発—

1. 目的

研究Ⅰにおいては、質問紙法を用いて、子どもたちの攻撃性、及び、それに付随する側面について検討してきたが、ここでは、さらに、子どもの攻撃性の源泉の一つとしての子ども同士の人間関係の把握のためのツール開発を試みる。研究Ⅰで、CBCL のもつ意味、及び徴候チェックリストが、子どもたちの攻撃性をとらえるうえで、有効なツールとなりうることが示唆された。特に、被虐待体験のある子どもたちの抱えている課題を包括的に捉えるのにすぐれていると考えられる。問題のところで見てきたように、攻撃性には、自己発現性の攻撃性と反応性の攻撃性があり、さらに、養育者の側のかかわりがその攻撃性の制御に非常に重要であることが示唆されている。

藤岡（2009）は、子ども同士の関係性を把握するために、レジデンシャルマップが有効であることを示唆したが、本研究では、特に、自己発現的攻撃性と反応性の攻撃性について、検討するためのツールとしてのレジデンシャルマップの有効性について検討する。

2. 方法

B 児童養護施設の入所児童 80 名について、レジデンシャルマップを実施した。あらかじめ、職員全員に対して、レジデンシャルマップについて説明し、子ども同士の関係性の把握に向けて、職員間で、その子供たちの様相を共有することにも有効であることを説明して、職員全員に対して実施してもらった。

調査対象は、B 児童養護施設の職員であり、子どもたち一人一人について、レジデンシャルマップを、同じ園舎の子どもたちについて思いうかべながら行った。

今回の研究で、対象となった施設は、一施設であるため、施設が特定されることを避けるために詳細はここでは記述しない。

3、結果

1) レジデンシャルマップ分析表による結果

以下に、レジデンシャルマップの結果の一部を示す。

表 17 レジデンシャルマップ分析表（B 施設園舎Ⅰ）

A				
職員番号	a	b	c	d
ギザギザの矢印の向かう先（受ける）	1	1	1	2
ギザギザの矢印の出る数（向ける）	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	1
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	1
良好な矢印の向かう先	3	5	4	2
良好な矢印の出る数	3	3	3	2
かなり良好な関係性の数	0	0	1	0
良好な関係性の数	3	3	3	2
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
悪くない関係性	3	0	1	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	13	12	12	13

B				
職員番号	a	b	c	d
ギザギザの矢印の向かう先（受ける）	0	0	2	1
ギザギザの矢印の出る数（向ける）	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	4	3	2	2
良好な矢印の出る数	4	2	2	2
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	3	2	2	2
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
悪くない関係性	2	0	1	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	1	1
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	4	0	0	0
合計	17	7	10	10

C				
職員番号	a	b	c	d
ギザギザの矢印の向かう先（受ける）	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数（向ける）	1	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	2	3	1	0
良好な矢印の出る数	2	3	1	0
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	2	3	1	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
悪くない関係性	2	1	1	3
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	9	10	4	3

D				
職員番号	a	b	c	d
ギザギザの矢印の向かう先（受ける）	4	1	2	0
ギザギザの矢印の出る数（向ける）	0	0	1	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	3	3	2	2
良好な矢印の出る数	3	2	0	2
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	3	2	2	2
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
悪くない関係性	3	0	2	4
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	16	8	9	10

E				
職員番号	a	b	c	d
ギザギザの矢印の向かう先（受ける）	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数（向ける）	0	0	1	0
かなり良好な矢印の向かう先	1	1	0	1
かなり良好な矢印の出る数	1	1	0	1
良好な矢印の向かう先	2	1	1	1
良好な矢印の出る数	3	2	1	0
かなり良好な関係性の数	1	1	0	1
良好な関係性の数	2	1	1	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
悪くない関係性	2	1	3	5
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	12	8	7	9

2) レジデンシャルマップ分析表（B 施設園舎Ⅱ）

以下に、B 施設園舎Ⅱの結果の一部を示す。

表 18 レジデンシャルマップ分析表（B 施設園舎Ⅱ）

F				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
良好な矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	1	3	3	3
点線が出る先	1	3	3	3
悪くない関係性	1	3	3	3
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	3	9	9	9

G				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	2	1	0
かなり良好な矢印の出る数	0	2	1	0
良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
良好な矢印の出る数	0	2	1	0
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	1	5	5	2
点線が出る先	1	5	5	2
悪くない関係性	1	5	5	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	3	21	18	6

H				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	2	3	2	0
ギザギザの矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	1	2	1
かなり良好な矢印の出る数	0	1	2	1
良好な矢印の向かう先	1	1	1	0
良好な矢印の出る数	1	0	1	0
かなり良好な関係性の数	0	1	2	1
良好な関係性の数	1	0	1	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	0	0	2	2
点線が出る先	0	0	2	2
悪くない関係性	0	0	2	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	5	7	17	9

I				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	1	2	2	0
ギザギザの矢印の出る数	0	1	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	1
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	1
良好な矢印の向かう先	0	1	2	0
良好な矢印の出る数	0	1	2	0
かなり良好な関係性の数	0	0	0	1
良好な関係性の数	0	1	2	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	0	2	1	3
点線が出る先	0	2	1	3
悪くない関係性	0	2	1	3
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	1	12	11	12

J				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	1	0	1	0
ギザギザの矢印の出る数	2	3	1	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	1	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	1	0	0
良好な矢印の向かう先	0	1	0	0
良好な矢印の出る数	0	1	0	0
かなり良好な関係性の数	0	1	0	0
良好な関係性の数	0	1	0	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	0	1	2	2
点線が出る先	0	1	2	2
悪くない関係性	0	1	2	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	3	12	8	6

K				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	1	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	0	2	1	0
良好な矢印の出る数	0	2	1	0
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	0	2	1	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	1	1	1	2
点線が出る先	1	1	1	2
悪くない関係性	1	1	1	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	4	9	6	6

L				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	0	1	0	1
ギザギザの矢印の出る数	0	0	0	0
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	2	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	2	0
良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
良好な矢印の出る数	0	2	0	0
かなり良好な関係性の数	0	2	0	0
良好な関係性の数	0	0	2	0
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	2	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	0	0	1	2
点線が出る先	0	0	1	2
悪くない関係性	0	0	1	2
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	0	7	9	7

M				
職員番号	e	f	g	h
ギザギザの矢印の向かう先	0	0	0	0
ギザギザの矢印の出る数	2	3	3	1
かなり良好な矢印の向かう先	0	0	0	0
かなり良好な矢印の出る数	0	0	0	0
良好な矢印の向かう先	2	0	0	1
良好な矢印の出る数	4	0	0	1
かなり良好な関係性の数	0	0	0	0
良好な関係性の数	2	0	0	1
苦手だと感じる矢印が向かう先	0	0	0	0
苦手だと感じる矢印が出る先	0	0	0	0
点線が向かう先	0	4	3	5
点線が出る先	0	4	3	5
悪くない関係性	0	4	3	5
信頼感 支援 好意感情 サポートをする	0	0	0	0
信頼感 支援 好意感情 サポートを受ける	0	0	0	0
合計	10	15	12	19

4. 考察

(1) B 施設園舎 I

表 1 に、ギザギザの矢印の出るところとしてとらえたところを見てみると、C,E,D それぞれの子どもについて記述があるが、興味深いことに、それぞれ職員の指摘が異なっていて、職員 a は、指摘した他の子どもについては、ギザギザの出るところを指摘していない。それに対して、職員 c は、二人の子どもについてそれを指摘している。子ども D は、ギザギザが向かっているところと 4 人中 3 人の職員が指摘している（指摘個数 職員 a;4,b;1,c;2）、攻撃性に対する反応としての攻撃反応（C;1）と理解できるかもしれない。それに対して、子ども C,E は、攻撃の発現はあっても、攻撃が向けられたという指摘が職員からは、なされてない。これは、自己発現的な攻撃性と理解できるかもしれない。あるいは、園舎での子ども同士の葛藤等に起因する攻撃ではないのかもしれない。

また、子ども A,B は、攻撃性の向かう先としてのみ指摘されており、相当なストレスを抱えている可能性が示唆される。子ども A の指摘個数としては、職員 a;1,b;1,c;1,d;2 となり、子ども B の指摘個数としては、職員 c;2,d;1 となる。

以上から、一見、穏やかに見える状況ではあるが、細かく見ていくと、子ども D が最も大きなストレスを抱えておいて、その次に、子ども A、そして、B と続いていることが示唆される。また、相対的に、D が攻撃を外に転嫁せざるを得ない状況も見取れる。

(2) B 施設園舎 II

まず、子ども F、J、K は、ギザギザの出入りの指摘がない。それに対して、ギザギザの出ているところを見てみると、I,J,M である。そのうち、M は矢印が出るだけ（M 出（e;2,f;3,g;3,h;1））で、矢印は向かって行っていない。自己発現的な攻撃性の可能性が高い。また、I,J は、矢印が向かう先にもなっているが、I 入（e;1,f;2,g;2,h;0）、I 出（e;0,f;1,g;0,h;0）、J 入（e;1,f;0,g;1,h; 記載なし）J 出（e;2,f;3,g;1,h; 記載なし）と表記し、相互に比較すると、I のほうが、攻撃性の対象になりがちであり、J のほうは、多少の反応性はあるものの、むしろ、自己発現的な攻撃性になっていることがうかがえる。

このように考えると、M と J については、自己の攻撃性のコントロールを、対人関係上のことよりも、むしろ、自分自身の過去のトラウマティックなこととの関係性から見直していくのか、あるいは、園舎以外のところからくる怒りの源泉を考慮する必要があるかもしれない。

一方で、L,H は、ギザギザの矢印が一方的に当該児童のほうに向かっている。攻撃性の対象に一方的になっている可能性がある。L 入（e;1,f;0,g;1,h;0）、H 入（e;2,f;3,g;2,h;0）と表記すると、H のほうが、L に比べておかれている状況は深刻であることが分かる。

攻撃性や怒りのことを考えるときは、その向う先の子どもたちへの支援も重要となる。支援の優先性や深刻性などを配慮する必要があるだろう。

また、良好な矢印が出る数や、関係性の数などを分析してみると、H はかなり良好な関係性で、ギザギザの矢印が向かっている（攻撃性の向かう先）のを補っている可能性がある。I もギザギザの矢印が向かう先の多さを、良好な他の子どもとの関係性でバランスを取っている可能性がある。

（３）レジデンシャルマップ活用の意義

攻撃性は、単独では生じることは稀で、むしろ、関係性の中でこそ生じる。だからこそ、このような関係性を考えるきっかけとなるようなアセスメントツールを活用することが重要であると考えられる。また、攻撃性の中の、自己発現性と反応性を分けて考えることと、その関連性を見ることの二つが重要であろう。また、攻撃性という視点だけでなく、それらを補償している良好な関係性も合わせてみていくことが大事である。色を変えて表記したところを分析してみると、そのバランスが見て取れる。

Ⅵ 総合考察

１．CBCL の活用について

CBCL の結果を見てみると、坪井（2008）の被虐待群（A 群）の結果と今回の調査の結果が非常に近い数値を示していた。CBCL を児童養護施設における子どもたちの問題行動或いは支援のターゲットとするべき指標行動として非常に有効なアセスメントツールとなるということが示唆されたが、子どもたちの課題性、問題行動（支援の対象としての問題性）を見ていくうえで、スタンダードとなる可能性が示唆された。

２．徴候チェックリストの信頼性と基準関連妥当性の検討

信頼性の検討のために、クロンバックの α 係数を算出したが、すべて、0.7 以上であり、今回の調査で、徴候チェックリストの信頼性について、示唆された。徴候チェックリストの基準関連妥当性については、CBCL の下位尺度及び徴候チェックリストの下位尺度間の相関から、徴候チェックリストの基準関連妥当性が示唆された。行動、感情、社会性の次元は、身体的訴えをのぞいて、すべてにおいて、有意な相関が示された。また、認知、身体性と精神性については、CBCL のすべての下位尺度との有意な相関が示された。一方で、CBCL の身体的な訴えは、上記のような問題行動とは独立して生じる可能性も示唆された。すでに記述したように、徴候チェックリストは、臨床的な場面で使用されて、子どもたちの抱える課題について包括的に捉えることができる。今回は、その徴候チェックリストが、妥当性、信頼性共に検証されている CBCL によって、その相関の高さから、併存的妥当性あるいは基準関連妥当性の一部が検証されたことは意義のあることと考えられる。

３．レジデンシャルマップ活用の意義

レジデンシャルマップの結果及びその考察から見て取れたように、レジデンシャルマップをさらに分解して、様々な視点から算出してみると、レジデンシャルマップだけでは見てこなかった側面が数量的に出てくる。今後、さらに、数量化の分析などが進むことが期待される。ロールシャッハテストがもともと質的データであったものを、量的データに転換してその有効性を高めていったように、レジデンシャルマップも多くの可能性を秘めていることがうかがえる。

4. 怒りの対処方略の理論的考察—2つの事例を分析の対象としながら—

以上を踏まえ、改めて、攻撃性の対処方略を検討する。この点については、すでに藤岡（2009）の報告がある。攻撃行動の自動化、攻撃行動出現時の解離傾向などについては、すでに分析しているが、以下、重要な人物との関係性が、情動の調整に有効である点を改めて図示する（図8）。ここでは、あえて、『重要な人物』という言葉を用いて、必ずしも、養育の初期から関わることが必要ではないという点を明確にしたい。

まず、『重要な人物』との関係性の構築が重要となる。援助者、養育者は、子どもにとっての心地よい体験の蓄積を心がけることで、心地よい関係性の体験が、蓄積されていく。そのうえで、主体性感覚が向上し、統合機能が作動してくる。この主体性とは、自分がバラバラになった感じがなく、軸が入っている感じとしてとらえることができるだろう。体験過程を重視した臨床動作法における「軸体験」と同様である。心地よさ、トラウマティックな体験、ニュートラルな体験などが、自分を脅かさないように並存してくる。例えば、自分にとってネガティブな感情であっても、併存することで、より対処できる感情となってくる。

心地よさの拡がりがあり、次第にトラウマティックな体験への対処が可能となってくる。また、フラッシュバック体験の緩和もそこで起こってくると考えられる。

そして、攻撃行動の「選択」の前に、重要な人物との心地よさ体験、重要な人物との信頼体験の出現してくるが、次第に、そのような体験が意識されることなく、主体性感覚の向上、統合感の出現によって、攻撃性の調整が行われるようになっていくと考えられる。例えば、〇〇さんが悲しむから、もう、人のことをたたいたりしない。〇〇さんがそばにいと、自分の気持ちを調整できる気がしてくる。たとえ、キレてしまっても、〇〇さんがいると、我に返ることができる。キレそうになっても、〇〇さんが、静かに語りかけるように関わってくれるので、気持ちが落ち着いてくるのが分かる。訳が分からなくなっても、〇〇さんが、名前を呼んでくれると、ふっと自分を取り戻すことができる。このような体験が、攻撃性への対処の方向性を示してくれるものと考えられる。

そして、ものごとの成り行き（帰結）体験の定着（攻撃性への対処体験の帰結）、愛着対象との＜情動調整体験＞、情動が調整できたというエピソードの蓄積が攻撃性対処の有能感も高めるものと考えられる。攻撃行動の「自動化」への対処体験は、自己の主体性を再確認し、主体的に自分に関わることができる。また、攻撃性へと入るスイッチを、自動化しない。攻撃性ではなく、落ち着かせる、気持ちを静めるほうへとスイッチを入れることができる（主体的選択）。このことで、たとえ、攻撃性が生じるきっかけとなることがあったとしても、主体性を見失わないで、対処の方向性へと自分を持っていくことができるだろう。

以上の点を検証する事例として以下の二つを提示する。なお、この事例は、**一週間集中包括的養育者—子ども関係性構築プログラム**に、施設職員と子どもが毎日通ってきて、一日3時間、5セッション（合計5日間）行った事例である。セラピストと子どもとのプレイセラピー、職員と子どもとのプレイの中での関係性の見直し、アイゼンドーンの開発したVIPPによるビデオフィードバック法、職員自身の人生の振り返り、人生におけるターニングポイントの心理劇、養育方法の見直し、共感疲労・共感満足の観点による職員のファンクショニングの見直しなど

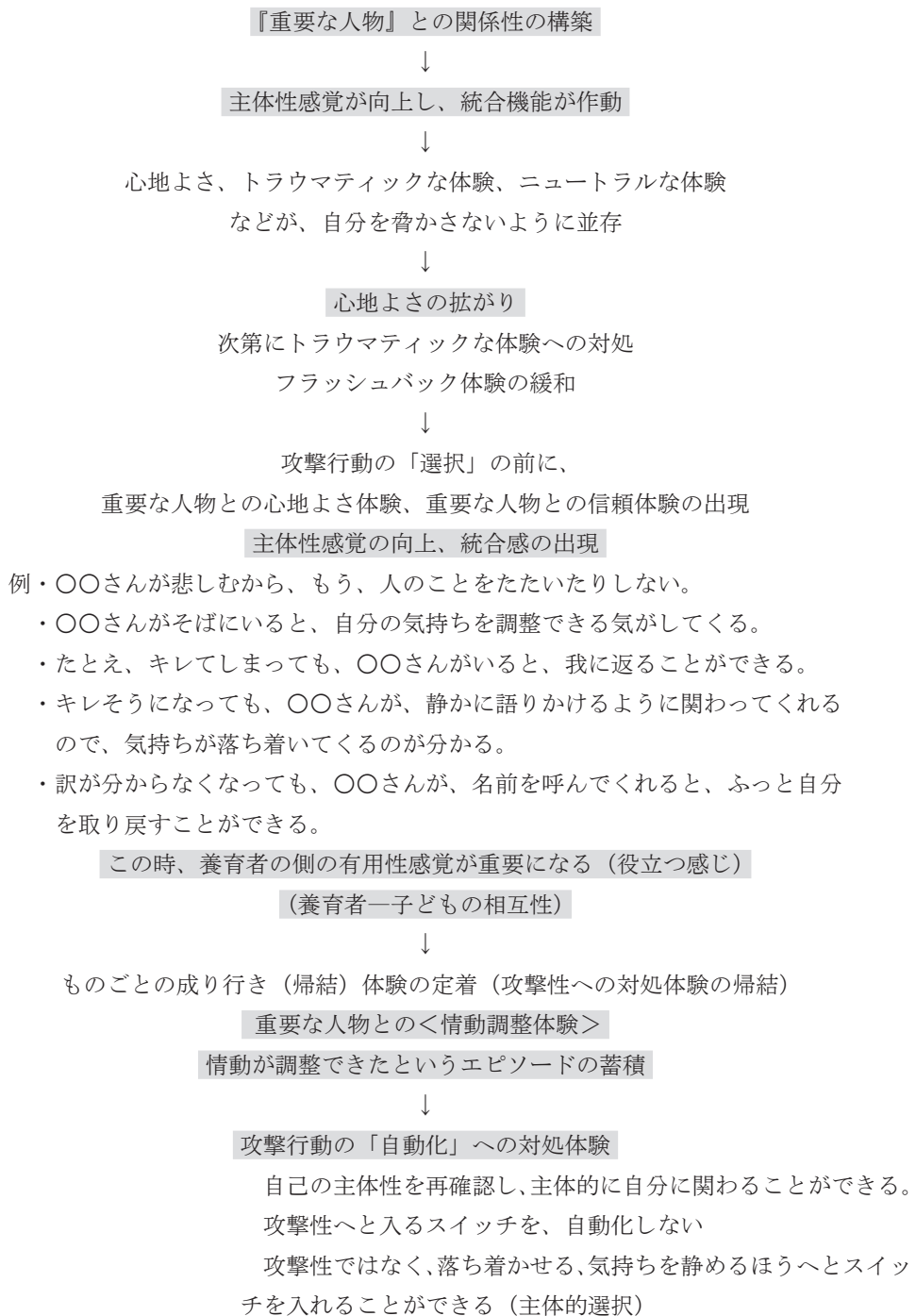


図8 攻撃行動の「自動化」への対処のメカニズム（藤岡 2009 を新たに修正）

によって構成されている。なお、これについては、別の機会に報告する。

子ども A（自己発現的な攻撃性の事例）

子ども A は対人場面で常時攻撃的な側面を示し、A は、「死ね、くそ、ばーか」を連発し、職員に対しても、軽い感じではあるものの、パンチが出たり、平手が出ていたりしていた。A にとって、攻撃は、自分の内的な世界を防御するためのものであり、そこを常を守っていなければならないという状況であった。また、対象となる内的表象も不安定であると考えられ、明確な親密性を表現できず、直接的な感情表出、たとえば、遊びの場面では、ぬいぐるみをたたく、なげる、けるなどを繰り返していた。

しかし、次第に、支援者の像が明確になるにつれて、かくれんぼをすることで自分を見つけてもらう喜びを表現したり、自分にみたてたぬいぐるみを抱っこしたりとできるようになっていった。

また職員との関係性も、次第に変化し、職員を「頼れる存在」、「予測がつく存在」として認知し始めていった。

これまでの A は攻撃を通して、人とのコミュニケーションを行っているものの、その背景には、非常に脆弱な自我が控えており、そこに踏み込まれることを拒絶していた。それが次第に変化していった。

攻撃性のコントロール、攻撃性への対処の一つの介入方法であり、特定の重要な人物を構築することで、代理的な存在性が、次第に広がっていった、職員や他の子どもたちとの関係性も改善されていった。

子ども B（反応性攻撃性の事例）

B も攻撃性に課題を抱え、特に、職員や子どもの自分への様々な理不尽と受け取られるような対応に対して、反応するという形で、攻撃性によって反応をしようとしていた。

B の攻撃性の出現には、時系列とエピソードの流れがあり、それを筆者は、「**攻撃性のシークエンス（流れ）**」があるととらえている。そのシークエンスの途中でやめようと思っても、子どもは一回はいったスイッチを切ることはできない。ピエール・ジャネのいう「自動化」が起きてしまっている。そのシークエンスが起きる前に、攻撃性への対処を行い、自分の中の調整を誰か（重要な人物、代理的愛着対象）と行うことが重要となる。

本セッションでは、職員を含めた何人かの代理的愛着対象を得る（あるいはさらに修復する）ことができ、自分の中にある攻撃性に対して、何とかしなければならないという志向性が高まっていた。

二つの事例を通して

この二つの事例から見てくるのは、関係性構築の多様性であり、特に、怒りの表出などの情動表現を、それをプレイの様々な課題に置き換え、対応可能なものにすることによって、情動調整の実践の場にしたことである。子ども A は、粘土を下にある粘土板に向かって投げつける、ぬいぐるみにパンチをするなど非常にシンプルな怒りの表出がみられたが、むしろそれを否定することなく、安全感を確保しながら、十分な場を与えた。その中で、次第に、怒りの対象となっていたぬいぐるみを「抱っこ」するようになっていったり、かくれんぼを通して、

繰り返し、自分を発見してもらえる喜びを味わったりする中で、次第に子どもは変わっていった。自己発現的な攻撃性は、このように、自分の中にある化け物のような怒りの源泉を表現する方法の中で、より安全に対処できるという体験の蓄積が行われたと考えられる。子どもは、5日間という短期間であったが、表情が非常に穏やかになり、攻撃的な言動も激減した。また、その後の施設での様子を聞いても、「馬鹿」、「死ね」などの言葉が出なくなり、また、職員の言葉が非常にストレートに入るようになっていった。

また、子どもBは、反応性の攻撃性ということが中心となる課題であったが、安全感を確保し、しかも、かかわりの中でほとんど怒りを誘発することがない場合、非常に穏やかに5日間を過ごすことができた。その穏やかな情動体験を基礎としながら、自分がなぜキレてしまうのか、どういう文脈で自分を見失ってしまう時があるのか、またそのときに、どのように職員の力を借りながら、また、自分自身の力でそこから回復するのかということを、穏やかな情動体験を基礎に置きながら(まさに、情動を調整しながら)、語ることができた。このことを何とかしたい、自分の反応してしまう攻撃性を何とかしたいという志向性が十分感じられる事例であり、5日間の集中セッションから、そのありのままの姿が浮き彫りになった。施設においても、時々子どもどうしのトラブルに発展したりすることもあるが、自分の中で何とかしなければならないという志向性は変わらず、情動調整への努力が職員との間で行われている事例である。

以上の事例二つ共に、大きなポイントは、図8のなかの関係性の構築の出発点のところで、職員による関係性を構築する志向性や有用性が大きな役割を果たすということである。「関係性がうまく構築できなくてもあきらめることなく根気強く行うことで、子どもはきっとこっちを振り向いてくれる」、「自分の養育の方法が必ずしもすべての子に合うわけではなく、むしろ、子どもの様子を見ながら、子どもに合った関わり方をその子と模索するというのが大事」などの職員の語りから、職員の(子どもへの)志向性や(自分は役立つ存在である)有用性がこの関係性構築の作業を支えているのが分かる。

そのうえで、子どもの側の主体性感覚が向上し、統合機能が作動し、心地よさ、トラウマティックな体験、ニュートラルな体験などが、自分を脅かさないように並存するようになり、職員との(セラピーにおいては、セラピストと)心地よさの拡がり that 起き、次第にトラウマティックな体験への対処、フラッシュバック体験の緩和が行われていくものと想定される。仮に反応性の攻撃性が出現しても、攻撃行動の「選択」の前に、重要な人物との心地よさ体験、重要な人物との信頼体験の出現、あるいは、この職員とだったら、攻撃性を対処できるという有能感が体験的に沸き起こり、主体性感覚の向上、統合感の出現につながるのではないかと考えられる。心地よさの体験は、関係性構築においても、関係性を持続させるうえでも、大きなキーワードになるのではないかと筆者は考えている。「一緒にいて楽しい。ほっとする。」この感覚は、心地よさ、トラウマティックな体験、ニュートラルな体験などが、自分を脅かさないように並存するという意味において、非常に重要と考えられる。

本研究では、攻撃性対処プログラム構築に向けてのアセスメントの検討と、プログラム構築における理論的な考察を行っていき、その際、2つの事例についても触れた。今後は、さらに、攻撃性対処プログラムの暫定版を作成し、「日常における養育」プログラム、定期的な研修プ

プログラム、一週間集中プログラム、ライブスーパーヴィジョンを含めた継続的な職員支援プログラムの大きく4つのバリエーションの中で、特定化し、効果を検証していくことが求められていると考えている。

参考文献

- Figley, C. R. 2007 Private discussion at Florida State University (2007/02/24)
- Figley, C. R. 2011 Private discussion at Tulane University (2011/07/5)
- 藤岡孝志 2007 愛着臨床と子ども虐待に関する研究 日本社会事業大学社会事業研究所年報 第43号 25－61.
- 藤岡孝志 2008 愛着臨床と子ども虐待 ミネルヴァ書房
- 藤岡孝志 2009 児童養護施設における養育困難児童への対処に関する研究—レジデンシャルマップの活用と愛着臨床アプローチ（CAA）を通して— 藤岡孝志 日本社会事業大学研究紀要 第56集 23－43.
- 藤岡孝志 2011a 子ども虐待への新アプローチ「愛着臨床」—愛着理論の観点に基づく子ども支援・養育者支援— 社会保険研究所
- 藤岡孝志 2011b 「共感疲労の最適化水準モデル」とファンクショニング概念の構築に関する研究 日本社会事業大学研究紀要 第58集 171－220.
- Fujioka, T. 2006 Compassion Fatigue and Dissociation -Through The Clinical Approaches by Pierre Janet- Journal of Social Policy and Social Work Vol.10. 23 - 33.
- Fujioka, T. 2011 Multiple Regression Analysis of Compassion Fatigue/ Satisfaction Questionnaires, and Correlation between these Questionnaires and Care Providers' Behavior (FR behavior) in Japanese Child Welfare Facilities. Journal of Social Policy and Social Work. Vol.15. 39-57.
- 藤岡孝志・加賀美尤祥・加藤尚子・和田上貴昭・若松亜希子 2003 児童福祉施設における協働と心理的支援に関する研究 日本社会事業大学社会事業研究所年報 第39号 63－84
- Mullin, B.C. & Hinshaw, S.P. 2007 Emotional Regulation and Externalizing Disorders in Children and Adolescents. Gross, J.J. (Ed.) Handbook of Emotion Regulation. The Guilford Press; New York. 523-541.
- Shaver, P.R. & Mikulincer, M. 2007 Adult Attachment Strategies and the Regulation of Emotion. Gross, J.J. (Ed.) Handbook of Emotion Regulation. The Guilford Press; New York. 446-465.
- 鈴木葉子 2004 被虐待児のこころを支える生きがい感—児童養護施設における調査— 子ども虐待とネグレクト 第6巻第3号
- 坪井裕子 2008 ネグレクト児の臨床像とプレイセラピー 風間書房

資料 1

子どもの課題（徴候チェックリスト）（新版）

子どもの番号（ID番号） _____

記録した年月日 _____ 年 _____ 月 _____ 日 記録者（ID番号） _____

この1週間の子どもの様子を思い浮かべ、

あてはまる（5） から あてはまらない（1） まで、5段階で評価してください。

例

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

行動

1. したいと思ったらすぐにしてしまうなど、衝動性をコントロールすることができない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

2. 自分の体を傷つけることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

3. 自分が傷つくことをわざとすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

4. 怒ったり、イライラした時に物を壊すことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

5. 怒ったり、イライラした時に、人をたたいたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

6. 「お前のことをぶつぞ」など言葉でおどすことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

7. 宿題やお手伝いをしない、など期待されることに応えない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

8. 人のこととかおかまいなしに、しがみついたり、注意を引こうとすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

9. 物や金を盗むことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

10. 嘘をついたり、だましたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

11. 食べ物などを自分の机の中や部屋の隅に溜め込んでしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

12. 適切ではない性的な態度や行動をしてしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

13. 動物に対して、残酷なことをしてしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

14. 遅くまで起きていたり、夜中に起きて歩き回ったり、夜泣きや夜驚がある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

15. パンツの中でおしっこやウンチを漏らすことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

16. ルールを守らなかったり、反抗的になったりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

17. 絶えず落ち着かない、など多動傾向がある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

18. 偏食があったり、だらだら食べたり、食べ方のマナーがよくなかったりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

19. 火とか血、悪いことに没頭することがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 4 3 2 1

20. しつこく意味のない質問を繰り返したり、相手構わず、おしゃべりをしたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

21. 自分の周りのいろいろなことに過敏になっていることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

22. 新しいことやこれまでと違うことがあると、何もできなくなってしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

認知

23. 同じ間違いを何回もしてしまうように、因果関係をつかむのができないことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

24. 学習障害などの理由で、勉強をうまく進めることができないことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

25. 人の話す言葉をよく理解できなかったり、言葉の遅れがみられたりする。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

26. 自分のことを犠牲者でいろいろなことに無力だと思っている。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

27. 世の中は自分を中心に回っている、など偉そうに振舞ったり考えたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

感情

28. 養育者からの愛情表現を受けつけなかったり、拒否したりする。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

29. イライラしたり、自分の思い通りにならないときに、激しく怒る。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

30. 悲しくなったり、落ち込んだり、無気力になったりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

31. 場にそぐわない感情表現をすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

32. 気分が変わりやすくなっている。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

社会性

33. 表面的で愛想よくしたり、愛嬌を振りまいたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

34. 人と仲良くなるためのアイコンタクト（目と目をあわせる）ということをしてしない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

35. 知らない人にも誰に対しても愛情表現をしてしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

36. 友だちと仲良くできないことや仲のよさが長続きしない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

37. 人の言ったことやルールに従うことができない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

38. 自分の間違いや問題をほかの人のせいにして責めることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

39. 他の人を傷つけたり、害を加えたりいじめたりする。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

40. 人から傷つけられるように、自分のほうからもっていってしまうことがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

41. 他の人との間で信頼関係を築けない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

42. 人を仕切ったり、自分の思い通りに動かそうとしたりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

身体

43. 歯磨きをしなかったり、お風呂に入らなかったりと、不衛生なところがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

44. 肩や背中など、体のどこかに慢性的に硬いところがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

45. 事故にあいやすいところがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

46. 痛くても無理に我慢する。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

47. ちょっとした怪我ですぐに大げさに騒いだりすることがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

48. 親しさを表現するために触れたりするなどの身体接触を避けるところがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

49. 怒りやすかったり、落ち込みやすかったり、依存的だったり、親など家族の特質を引いているところがある。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

精神性

50. 生きていることの意味や目的、意義を感じていない。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

51. 信仰や人との共感などをもって人に接したり、人に対して敬意を示したり、人の気持ちをわかろうとしたりすることが乏しい。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

52. 悪いことや、人生の暗いところのほうばかりに気持ちがいってしまう。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1

53. 自責の念や良心の呵責などが欠けている。

非常にあてはまる ある程度あてはまる ややあてはまる ほとんどあてはまらない 全くあてはまらない

5 ————— 4 ————— 3 ————— 2 ————— 1